

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 6 月 2 日現在

機関番号：32605

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2013～2016

課題番号：25510011

研究課題名(和文) 孤立している独居認知症高齢者の早期発見から終末期までの支援モデルの開発

研究課題名(英文) Development of support models from the early detection to the terminal stage of the staying alone dementia elderly person standing alone

研究代表者

久松 信夫 (HISAMATSU, Nobuo)

桜美林大学・総合科学系・准教授

研究者番号：30389845

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,900,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、地域包括支援センター社会福祉士による、独居認知症高齢者の早期発見と早期対応の過程を明らかにし、これらの過程のあり方の研究に示唆を得ることが目的である。社会福祉士9名にインタビュー調査を実施し、修正版グラウンデッド・セオリ・アプローチによる分析を実施した。独居認知症高齢者の早期発見過程には、発見の基盤づくりを行いつつアウトリーチ視点による関わりがあり、ともに直接的介入と状況の共有に至る。その後の対応は、直接的介入と状況の共有を基点に他職種や住民に関わりの依頼を行い、緊急性の察知と介入を実施し社会資源へのつながりと本人に焦点化した支援方針を立てるといった要因を確認することができた。

研究成果の概要(英文)：To ascertain the process by which social workers initially identify and promptly respond to elderly people with dementia who live alone in order to gain insight for research into appropriate forms of initial support for those individuals. Social workers were interviewed and their responses were analyzed using a grounded theory approach. The process of early identification of elderly people with dementia who live alone begins with Laying the Groundwork for Identification of Dementia and Interacting with the Client through Outreach, leading to Direct Intervention and Informing Relevant Parties of the Client's Situation. The social worker subsequently Asks for Action by relevant professionals and members of the community. The social worker then Determines the Urgency of the Client's Situation and Conducts Interventions, and the social worker also Formulates an Approach to Support that is Linked to Social Resources and that is Focused on the Client.

研究分野：高齢者ソーシャルワーク

キーワード：独居認知症高齢者 地域包括支援センター 社会福祉士 ソーシャルワーク 早期発見 早期支援

1. 研究開始当初の背景

地域で暮らす認知症高齢者を早期発見する在宅ケアにおける社会福祉専門職の高齢者や地域住民への積極的な介入（アウトリーチ）に関する先行研究では、その積極的な介入（アウトリーチ）が在宅介護支援センターで効果的に発揮できる条件と、その実践内容の因子を発見した研究（久松ら 2006）や、地域包括支援センターで積極的な介入の実践が行われているかを確認している研究がある（久松ら 2010, 2011）。その結果、地域包括支援センターの職員は、特に一人暮らしの認知症高齢者の早期発見に苦慮していることがわかった。このことは、地域で暮らす認知症高齢者を早期発見する方法が確立していないことが背景にあると考えられた。

また、認知症高齢者が一人暮らしをしていると、その存在を発見しても、認知症の症状から判断能力が低下しているために支援が進展しないことや、認知症が重度になり意思疎通が難しくなるなどした場合に、センターの社会福祉専門職は支援に苦慮していることが明らかになった（久松 2012）。さらに、自宅で終末期を迎える一人暮らしの認知症高齢者も少なくなく、センターの職員などが試行錯誤で支援にあたっている現状がある。

したがって、筆者のこれまでの研究成果と先行研究から、一人暮らしの認知症もしくはその疑いのある高齢者の早期発見から終末期の各局面における支援方法のモデル開発は必要不可欠な研究である。

2. 研究の目的

認知症もしくはその疑いのある高齢者を早期発見し早期に対応することの重要性は指摘されつつも、実際のソーシャルワーク実践に

基づいた研究やソーシャルワーカーがどのように取り組んでいるのかについて言及している既存の研究が不十分であるため、本研究は認知症もしくはその疑いのある高齢者をソーシャルワーカーがどのように早期に発見し対応しているのかに焦点をあてた。

本研究の目的は、独居の認知症高齢者を地域包括支援センターの社会福祉士が、どのように早期発見し早期対応しているのかそのプロセスを明らかにすることである。

3. 研究の方法

（1）調査協力者

本研究の調査協力者は、包括センターの社会福祉士である。同時に、包括センターの社会福祉士として実務経験3年以上の者とした。その理由は、独居の認知症高齢者をめぐる相談事例を担当し、また認知症高齢者の早期発見に携わり、その一連の活動を言語化できる年数はおおよそ3年以上であると想定されたためである。

調査協力者の選出については、包括センター長や社会福祉士などの紹介によって、上記の条件を満たす社会福祉士から調査協力を得た。その際、研究テーマに合うデータを十分に得られる対象者であり、なおかつ豊富なディテールを提供できることが期待される対象者から調査協力を得た。調査協力者は9人（男性1人、女性8人）であり全員関東地方に属していた。平均年齢は44.3歳（ ± 11.7 歳）、包括センター社会福祉士としての平均実務年数は7.1年（ ± 2.9 年）であった。

（2）調査方法

調査方法は、本研究の目的からインタビューを実施した。インタビュー調査は2014

年5月～8月に行い、追加調査を2015年4月～5月に、半構造化インタビュー法を用いて実施した。インタビュー項目は、独居の認知症（の疑いのある）高齢者をどのように早期に発見する方法を採っているか、で発見した独居の認知症（の疑いのある）高齢者の「認知症」が進行した場合、どのような方法で関わっているか、認知症（の疑いのある）高齢者が関わりを拒否する場合や、孤立死を防止するためにどのような方法で関わっているかである。

調査協力者がインタビューで語った内容を逐語録として書き起こし、それをデータ源とした。これを、修正版グラウンドッド・セオリー・アプローチを用いて分析した。

4. 研究成果

(1) 概要

分析の結果、29の概念を生成した。その概念を10のサブカテゴリーにまとめ、さらに6つのカテゴリーにまとめた。まず1つめのカテゴリーでは、全部で6つの概念を生成した。【気になる高齢者の情報の収集・共有により早期発見につなげる】【連携の場における言いやすい環境づくり】【情報提供者の固定化・新規ルートの確保】【高齢者本人が自覚していない困り事の察知・把握】の4つの概念を〔情報の収集経路の確保と表面化していない情報の察知〕というサブカテゴリー、【認知症理解促進による互助的な地域づくり】【業務を実際に見てもらうことで協力者を増やす】の2つの概念を〔認知症理解促進のための地域・協力者づくり〕というサブカテゴリーとし、この2つのサブカテゴリーを収斂したカテゴリーを<初期情報の把握と早期発見の基盤づくり>と命名した。以下、その他のカテゴリー

も同様の手順で生成した。サブカテゴリーとカテゴリーの相関関係を示す全体像を可視化を目的として図式として表した。この図式から、早期発見と早期対応プロセスのストーリーラインは2局面に分けられると考えられた。

(2) 結果のストーリーライン

前項の結果のストーリーラインを記述する。なお、《 》はコアカテゴリー、< >はカテゴリー、〔 〕はサブカテゴリー、【 】は概念を示す。

まず、独居の認知症高齢者を早期発見するにあたり、包括センターの社会福祉士は、“早期発見”の準備段階として<初期情報の把握と早期発見の基盤づくり>を行う。この<初期情報の把握と早期発見の基盤づくり>を経たのち、<アウトリーチの工夫と関係づくり>または《直接的介入による状況把握と協力依頼》に移る。この段階までが早期発見である。

次の早期対応では、包括センター社会福祉士は《直接的介入による状況把握と協力依頼》を継続しながら、一方でいくつかの“関わり”と相互に影響を受ける関係をもつ。まず、包括センター社会福祉士以外の“関わり”を促す<介入代行の依頼と関わり拡大>である。また、<早期に社会資源につなげ本人に焦点化した支援方針を立てる>行動も展開する。一方、<緊急性の察知と事態悪化による介入>も支援の重要な視点である。この3つのカテゴリーは、《直接的介入による状況把握と協力依頼》とそれぞれ相互に影響し合う関係をもち、よって《直接的介入による状況把握と協力依頼》は中核的な活動であるコアカテゴリーとして位置づけられる。

加えて<初期情報の把握と早期発見の基盤

づくり><アウトリーチの工夫と関係づくり>
《直接的介入による状況把握と協力依頼》<
介入代行の依頼と関わりの拡大>の4つのカ
テゴリー内にある，複数のサブカテゴリー同
士は，各々のカテゴリーを強化するために相
互作用を起こしている．

<引用文献>

久松信夫，小野寺敦志，認知症高齢者と
家族へのアウトリーチの意義，老年社会
科学，第28巻第3号，2006，297-311

小野寺敦志，久松信夫，地域包括支援セ
ンター業務評価と住民連携にかかわるア
ウトリーチ，平成21年度老人保健健康増
進等補助事業報告書，地域住民連携によ
る認知症・介護予防サービス企画支援に
関する研究報告書，2010，18-46

小野寺敦志，久松信夫，地域包括支援セ
ンターの地域連携体制づくりに関する調
査，平成22年度老人保健事業推進等補助
金老人保健健康増進等事業，地域高齢者
の生きがいと健康づくりモデル構築に向
けた自助・互助機能活用とソーシャル
キャピタル指標開発の研究事業報告書，
2011，17-41

5．主な発表論文等

〔雑誌論文〕計2件

久松信夫「認知症高齢者支援における
ソーシャルワーカーの代弁プロセス」
日本社会福祉学会『社会福祉学』57(4)，
71-84，2017年 査読有

久松信夫「ソーシャルワーク視点から
みた認知症初期集中支援チームの意義」
『桜美林論考 自然科学・総合科学研究』
第8号，2017年 査読有

〔学会発表〕計1件

久松信夫「独居認知症高齢者の早期発
見と支援のプロセス」第16回日本認
知症ケア学会大会，2015年5月23日，
「札幌市教育文化会館（札幌市）」

6．研究組織

(1) 研究代表者

久松 信夫 (HISAMATSU, Nobuo)

桜美林大学・総合科学系・准教授

研究者番号：30389845